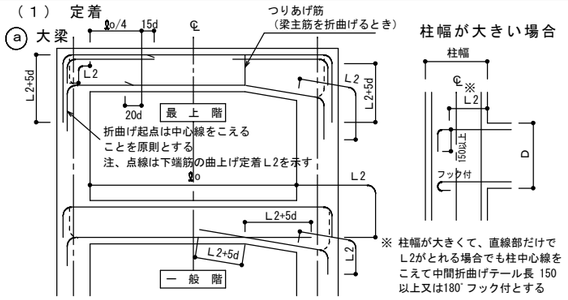
鉄筋コンクリート構造配筋標準図（２）

Ｌ＝鉄筋コンクリート構造配筋標準図（１）の２-（３）による。

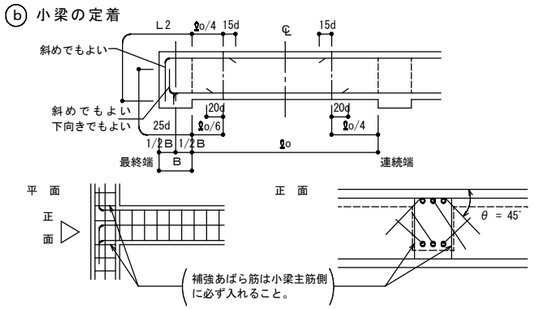
7. 大梁、小梁、片持梁

（１） 定着

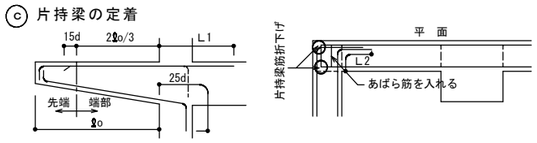
ⓐ 大梁



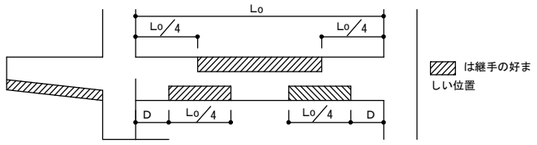
ⓑ 小梁の定着



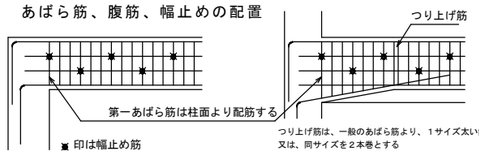
ⓒ 片持梁の定着



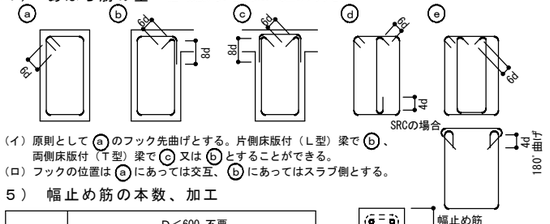
（２） 大梁主筋の継手



（３） あばら筋、腹筋、幅止めの配置



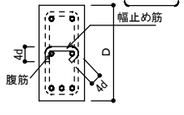
（４） あばら筋の型 （注 床版がない場合は135°以上のフックとする）



（イ）原則として ⓐ のフック先曲げとする。片側床版付（Ｌ型）梁で ⓑ、両側床版付（Ｔ型）梁で ⓒ 又は ⓑ とすることができる。
（ロ）フックの位置は ⓐ にあっては交互、ⓑ にあってはスラブ側とする。

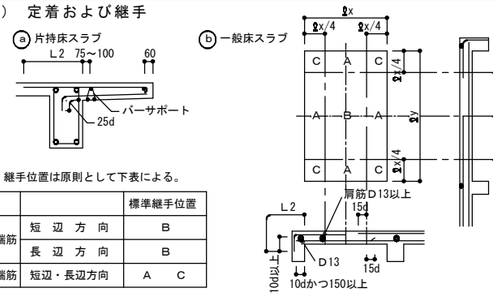
（５） 幅止め筋の本数、加工

腹 筋	Ｄ＜600 不要 600≦Ｄ＜ 900　2-Ｄ10（9φ）　１段 900≦Ｄ＜1200　4-Ｄ10（9φ）　２段 1200≦Ｄ　Ｄ10（9φ）@300以内
幅止め筋	Ｄ10（9φ）@1000以内で割り付ける



8. 床 板

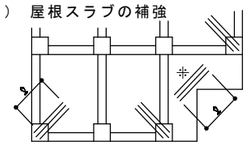
（１） 定着および継手



継手位置は原則として下表による。

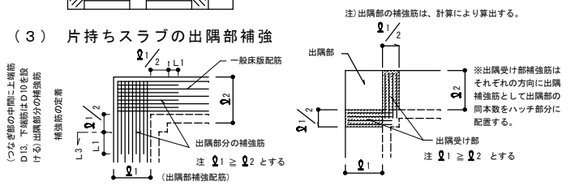
		標準継手位置
上端筋	短 辺 方 向	B
	長 辺 方 向	B
下端筋	短辺・長辺方向	A　C

（２） 屋根スラブの補強

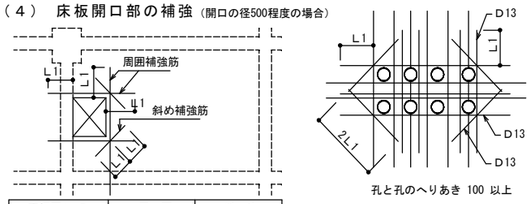


ⓐ 補強筋は各3-Ｄ13 又はスラブ主筋の同一径で ℓ=1500とし、上端筋の下に配筋する
ⓑ ※の箇所（入隅）各階補強する

（３） 片持ちスラブの出隅部補強



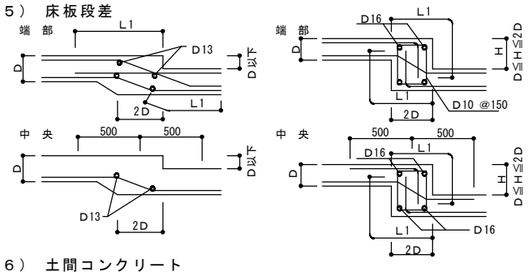
（４） 床板開口部の補強（開口の径500程度の場合）



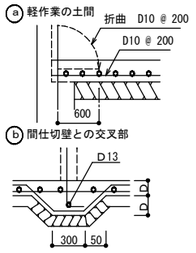
床板厚さ D	周 囲	斜 め
D≦150	各２－D13	各１－D13
150＜D≦200	各２－D13	各２－D13
200＜D≦300	各２－D19	各２－D16

注）設備の小開口が連続してあく場合は縦、横、斜補強筋とは別に開口によって切られる鉄筋と同じ鉄筋を開口をさけて補強する。

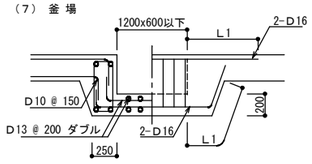
（５） 床板段差



（６） 土間コンクリート



（７） 釜 場

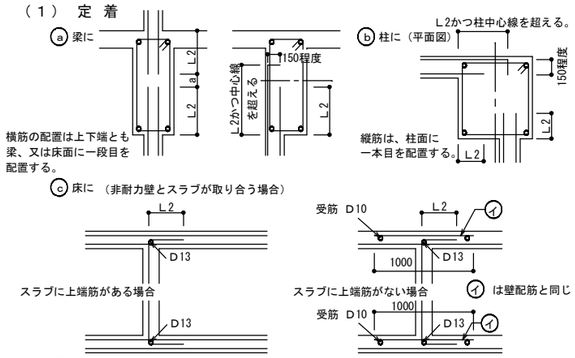


（８） 打継ぎ補強 （ダメ穴打継面について）

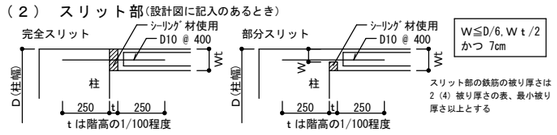
- 設計配筋間隔の1/2ピッチ　長さ2Ｌ1以上
- 無筋部分Ｄ10 @ 200　長さ800以上

9. 壁

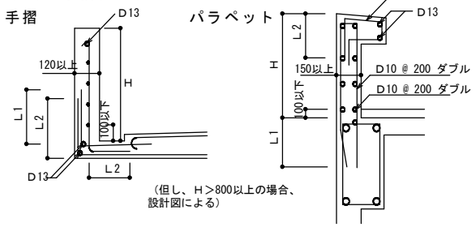
（１） 定 着



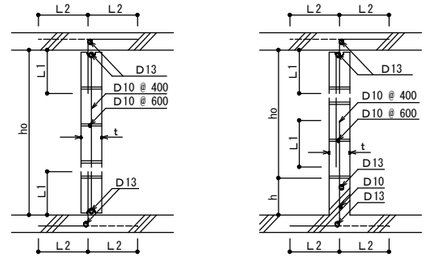
（２） スリット部（設計図に記入のあるとき）



（３） 手摺、パラペット



（４） コンクリートブロック帳壁

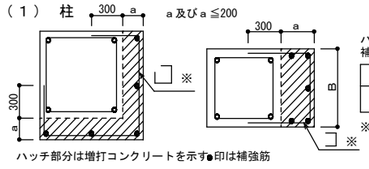


注） ho≦25tかつ3500以下とする。但し直交方向25t以内に壁、又は柱がある場合は除く。
注） hはコンクリートブロック段数調節寸法とする。但し、200≦h≦400
注） 継手部は必ずモルタルを充填すること。

10. 柱、梁増打コンクリート補強

（増打するときは事前に設計者、及び工事監理者と打合せのこと）

（１） 柱

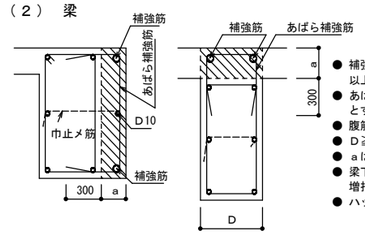


ハッチ部分の面積Ａcm²
補強タテ筋

A＜500	500≦A＜1000	1000≦A＜1500
3-D16	4-D16	6-D16

※ 柱と同径、同ピッチとする

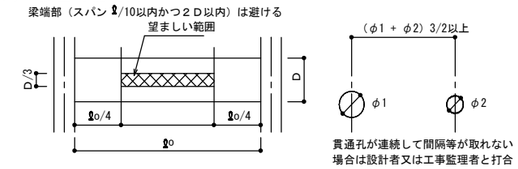
（２） 梁



- 補強筋は、梁主筋の１段落し径（D16以上）とする。
- あばら補強筋は、梁と同径、同ピッチとする。
- 腹筋Ｄ10ピッチは、梁の腹筋と合わせる。
- Ｄ≧400の場合は補強筋を３本とする。
- ａは100～200程度。
- 梁下端増打コンクリートの場合も上端増打コンクリート補強と同様とする。
- ハッチ部分は増打コンクリートを示す。

11. 梁貫通孔補強

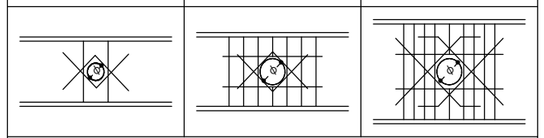
（１） 設置可能範囲



貫通孔が連続して間隔等が取れない場合は設計者又は工事監理者と打合せのこと。

（２） 鉄筋標準配筋 但し φ≦D/3とする

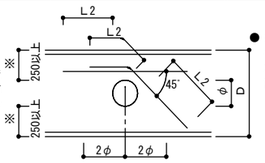
80≦φ≦100	100＜φ≦150	150＜φ≦250
折 筋　2－（2－D13） 縦 筋　ST　2－D13	折 筋　2－（2－D13） 縦 筋　ST　2-D13 @100 横 筋　2－（2－D13）	斜 筋　4－（2－D13） 縦 筋　ST　2-D13 @100 横 筋　2－（2－D13） 上/下縦筋　ST　2－D13



φ＞250

孔補強の有効範囲と定着長さのとり方

※ 部分について計算で確認された場合は右記の位置、寸法によらなくて良い。



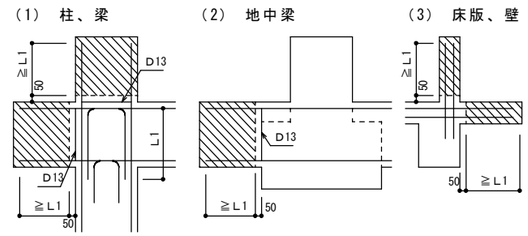
- 梁幅が 400を超える場合は補強筋でD13はD16又は、2-D13は3-D13と、各々読みかえる

（３） 既製品 （使用するときには、設計者又は工事監理者と打合せのこと）

□ リング型　□ パイプ型　□ 金網型　□ プレート型

12. 増築予定

（将来増築予定コンクリート増打ち部分は、増築時の鉄筋継手工法を考慮して措置する）



備考

一級建築士事務所○○○知事登録第○○○○号 株式会社 ○○○○○○一級建築士事務所 一級建築士○○大臣登録第○○○○○○号 ○○○○○	工事名称	（仮称）○○○○○共同住宅新築工事	設計年月日
	図面名称	鉄筋コンクリート構造配筋標準図（２）	縮 尺 / 図 番 S－03